
僕と六大始祖の学園記録

絃城恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と六大始祖の学園記録

【NZコード】

N2478Z

【作者名】

絃城恭介

【あらすじ】

少年は過去にとある女性に指導された。そしてまた、彼は何の因果か六大始祖として名を馳せた彼女を召喚する。

これは、そんな少年と女性のハートフル（笑）ストーリー
戦いも勉強もライバルも二人なら大丈夫！

タイトルは『僕と六大始祖の学園記録』になります。

プロローグ・召喚（前書き）

現在『オリジンブレッド・イモータル』は別サイトにて掲載するの
でこちらから削除させていただいております。

それがあたつて新作『僕と六始祖の学園記録』を新連載する所存
であります。

今まで一人称で書くことを避けたましたが、この作品は本当の
意味で書きたいと思っていますので、どうかよろしくお願ひします。

感想、一言、とにかくなんでもお待ちしております。

プロローグ・召喚

「「」」の儀式を成功させて、今まで僕に正当な評価を与えなかつた奴らを見返してやるんだ」

とある住宅街に存在する、一軒家に存在する空氣の冷え切つた地下室で、僕は小さく呟いた。

何故そんなところに居るのかと問われれば、ここが僕の自宅にある実験室……のような所だとしかいえない。

「でも、今回だけは間違いなく成功するはずさ。何故なら……爺が隠し持つてた魔道書があるからさ」

そして、僕は魔方陣に自分の出せる分の魔力をありつたけ注ぎ込んだ。

……注ぎ込んだ。

……注ぎ込んだ。

「失敗……だつて？ いや そんなはずは……」

いくら古い術式としても、あの爺が隠し持つていたほどの魔道書を使ってまで失敗するまで僕は才能がないわけではない。

「たかだか人間靈の使役なんて、使い魔の召喚と同じかそれ以下の技術だろ……どうしてこの僕がそんな作業を失敗するんだよ

だとしたら、失敗をするはずなんてないのだ。

もう一度、ありつたけの注ぎ込めるだけの魔力を注ごうとしたとき、小さな爆発が魔方陣上に発生し、魔力を注ごうとしていた僕は

それに巻き込まれ、壁に思いつきり頭をぶつけた。

「はがあもつ…………！？」

僕は壁にぶつけた頭を労わるように摩りながら、爆発の起きた魔方陣に目をやる。

「いたたたた…………これでも物理戦闘だけなら評定はAランク超えてるんだけどな」

そもそも魔術を習つ身だと云つのにもかかわらず何故か、僕こと今神洸の家系は物理戦闘における評価がずば抜けて高い。その代わりに、一番必要な魔術ランクの評価が極端に低いのだ。

それはそれとして、魔法陣上に発生した爆発の煙が晴れると、そこには何かの生き物が立つて……はいない。おそらく何らかの失敗によつて召喚が完全に成功しなかつたようで、胡坐をかきながら、片手で頭をわしわしと搔いている。あの生き物は

髪が燃えるような朱色をしていて、それなりに短くカットされていいる。

背は僕より遙かに高くて180センチ前後はあるだろう。子供っぽい……とは口が裂けてもいえないような体格をして入るが、どこからどう見ても人間で、間違いなく女性である。端整な顔立ちで、随分人懐っこさそうな目をしている。

それどころか、既にすたすたとその足を動かして僕に近づいてきている。しかも、その顔には美しい笑顔しか見つけることができない。

これが、爺の魔道書に記されていた人間靈……でいいのか？
いや、まだ確定はしていない。

僕は何事も失敗だけはしたくない。まずは、挨拶を兼ねた確認からするべきだろう。

「あ、君が僕に呪喚された人間靈……でいいんだよね？」

僕は「こいつと笑つて、少し緊張感を隠し切れないままに尋ねた。

「ええ、ワタシをあの『恋々しい爺の封印』から解き放つてくれたのは貴方でいらっしゃるわよ。洗ちゃん」

あれ……懐かしい声だ

「え……洗ちゃんって……もしかして」

嫌な予感が背中を駆け巡り、冷や汗が背中を伝つて気持ち悪い。

「あ、昔に貴方の教育係として呪喚された、ワ・タ・シ」

びりして気が付けなかつたのだらうか。

「教育魔魔 あまね 天音……姉さん」

訂正しよう……あの爺が隠し持つていた魔道書は、隠し持つていたのではなく封印していたのだと。

「でも……おつかしいわねえ。なんか、洗ちゃんとバスが繋がつてるんだけどこれつてビリコリとなの？」

天音姉さんはそこで再び胡坐を組むと、ほっぷに手を付けて僕に向かつて不思議そうに呴く。

「バス……？ も、もしかして」

急いで僕は自分で書いた魔法陣の確認作業を行う。

すると、気が付きたくないミスを発見してしまった。

つ、召喚契約と使い魔契約の術式を一文字ずつ書き間違えてる……

「ああ、そつかあ。だつたら、」これからまた一緒に洗ちゃん

僕に封印をとかれて召喚された教育悪魔」と天音姉さんは、ドS

「は、ははは……はあ
「あ、どうして溜め息吐くのー? もしかして洗いやんてば、まーたお姉ちゃんに何か言われるって思ったの?」

僕は元気なく再びから笑いをしようとした。

「だつて……え」

つもりだつたんだけど。
そうしたかったんだけど、そつはならなくて、く、くすぐりたい！
脇、くすぐるな、ちょ、苦しい！
姉さん、ちょ、やめてえええええ
！

せ何なのおおおおおおおお！

僕は「づくまつて身悶えた。

正直、ちょっとだけ涙が零れ出てきた。な、泣いてなんかないんだからな！

これが、僕と天音姉さんの使い魔契約の成立シーンだった。

くすぐりによつて引き攣つてしまつた腹筋に加えて、召喚の際に持つていかれた魔力もあつてか、僕の身体はいろいろな意味でボロボロだつた。

おそらくそのせいもあつてか、姉さんは昔と比べてもそれなりにソフトな接し方になつていた。

「ええつと。そうこええば姉ちゃんつてびつして爺に封印されたんだつけ……」

だから、昔の教師と教え子（笑）の状況よりは「くらかマシな関係に……そもそも使い間契約をしたにも関わらず姉さんは自由気まますぎる。

「えー、洗ちゃん忘れちゃつたの？　お姉ちゃんあんなに洗ちゃんのこと愛してたのにー」

「は？　え？　な、な、何のことだよーー？」

もう何のことだか覚えてないし……なんか思い出してみても碌な思い出がない。

「もう、だーかーら。子供の洗ちゃんのナードーして
「あああああああ！ 思い出したから、思い出したから言わない
でくれえええええ！」

「そうだった。姉さんは教育悪魔になる前の素材はサキュバス
淫魔の類だつたつけ。

それで爺がうらやましこだの何だの言つて……結局爺は自分の思
い通りにならないから封印したんだつけ？

「と言つた、爺も爺で封印の理由は碌なもんじゃなかつたような
「やうだねー。ま、契約した以上は洗ちゃんの願いを聞かないとい
けないのよねえー。それで、びつてしまたこんな真似したの？」

「姉さん……言つてこむ」とは確かに正しこと懇つたびれ、何で脱
ぐんですか？

「びつしてつて、僕は僕に正当な評価を『えなかつた奴らを見返し
てやりたくつて……』ていつかどつてどさん脱いでいくんだよ
！？」

「だつて、こんな密室で男性と女性がやることなんてシ
「そんなわけあるかああああ！ いいから服を着ろー。ていつかど
うしてそんなに勝手気ままなんだよー？」

そもそも、なんで契約して主になつたのにこんなにも立場が対等
……と言つよリ下なんだ？

「ああ、それはね 洗ちゃんの魔力程度じや使役なんて到底で
きないつてこと。せいぜい召喚が闇の山つて所ねえ」
「もつとオブラーートに包むように遠まわしに答へるよー。それ以前
」「びつして考へていること分かるんだよー？」

僕の喚く様な声に、姉さんは馬鹿にするよりヤケながら答える。

「だから、先刻さつときも言つたけどバスが通つてゐるでしょ。洸ちゃんも意識を集中してワタシのことを考えれば少しくらいならワタシの考えてこることも分かると思つわよ」

忘れていた……さつきまで散々自分で考えていた重要なことを。そうなのだ。僕こと今神洸と教育悪魔天音は何の因果か契約してしまったのだ。

「えつと、それと洸ちゃん。その『僕』って言つ一人称気持ち悪いわよ」

そして何度も言つが、姉さんは僕の専属の教育悪魔だった。

「べ、別に良いだろ……あの頃とは違つんだからせ」

だから、例え言葉にして拒否しても……身体が言つ事を聞いてくれない。

「えー、せめてお姉ちゃんの前だけでも昔みたいに『俺』って一人称にしてくれると嬉しいんだけどなあ」

「あ、ね、姉さん……また誘惑の魔眼使いやがつたな！？」

「ふふ、教え子は教育者の言つ事を聞くものよ」

勝利したような満面の笑顔を浮かべながら、姉さんは僕に絡みつくように抱きつくる。

どうやら、そのときの僕は俗に言つて、キレて、しまった状態にな

つたのだろう

「くそ、馬鹿にしやがって！ 契約者に命ずる、僕を、俺をからかうなああああああ！」

だから成功したのかもしれない。

「えつ、嘘……契約の強制執行が

ギアス

初めて行使する、マスターとしての従者に対する絶対の威力を持つ強制執行が。

「ど、どうだ！ 」これで姉さんも俺に逆らえないと、へへつ、俺にだつてできるんだ

だが、どうやら僕は強制執行の成功に浮かれていたようだ。だから本当の意味での敗北に気付くことができなかつた。

「でも、洸ちゃん？」

「な、なんだよ」

「ふふ、一人称が『僕』から『俺』になつたわよ」

「え、どうして……確かに俺の強制執行は成功

ね、姉さん……

まさか、誘惑の魔眼を解除しなかつたのか！？」

そこで姉さんは今まで笑いを堪えていたかのようににんまり笑うと、じう言つた。

「確かに強制執行は発動して、からかう、ことはできなくなつたけど、誘惑の魔眼の効果の使用禁止までは言われなかつたからね！。ちなみに残念だけど、洸ちゃんはワタシの前で『俺』つていうこと

しかできないからね

「な、んな……」

「それと、強制執行の同時許容は最大三個までだからよく考えて使うこと。分かつたかな洗ちゃん？」

「どうやらぼ……俺は、永遠に姉さんには勝てそうにありません。でも、同時にこれで良かったのかもしないと思う。なんせまだまだ未熟な俺を姉さんにまた、世話を焼いてくれるといつているのだから。

「なーんか照れちゃうな……じゃあ改めてようしくね、マスター」

顔を少しだけ赤らめて、姉さんは俺に手を出す。

俺はその手をがつしりと掴み、少し上にある顔を見上げて囁つ。言おうとした……

「よろし

「ああ、言い忘れていたけど召喚されたのはワタシを含めて一人と一匹だから」

そんな突然のカミングアウトに俺は耳をついてつい疑つてしまつた。ワタシを含めて一人と一匹？ じゃあ、残りの一人と一匹つてのはど？」……

「あら、本当に気付いてなかつたのね。まあ、ワタシの従者として召喚されたわけだから気付かなくても仕方ないか」

俺の考へていることに對して簡単に答えを述べてから、姉さんは指を弾く。

その音に反応するよつて、今まで何も存在していなかつた空間に

一人と一匹の虚像が現れる。それは次第に実体化してくると、俺よりも少し年下くらいの少年とトカゲに羽の生えたような形をした生物が出現した。

「少年つて……洗ちゃんも失礼ね。この娘はバステトのテト、こっちのこの子が龍王の子供のキュリオス」

「バステトつて……日本で言う猫又のことだよな？ それに龍王つて

「テトはエジプトの女神の末裔つてだけだから女神でも妖怪でもない純粹な人間よ。それに、龍王つて言つても旧世界の龍王だから成長しても大して強くならないから安心して」

そう言つて姉さんは微笑むと、近くにいたキュリオスを俺の頭の上に乗せる。

「あの、姉さん……一体なにをして……？」

そう疑問を口にしたとき、先ほどまで一言も話さずに黙つていたバステトのテトが口を開いた。

「どーしてテトがアンタみたいな人間に使役されないといけないんですか！？ そもそも胸があんまりないってだけで少年つてどういうことですか！ テトは女の子ですよ」

「はいはい。いい子だから静かにしてなさいテト」

「天音様、テトは納得いかないです。だってあの爺の息子ですよ！？ 絶対に信用できないですよお」

酷い言われように心が折れそうです。

もつとも、流石に年下の子供に馬鹿にされたところで俺の自尊心は……自尊心は絶対に揺るがない……と思う。

「まあ、ワタシの任意で召喚と返還はできるから安心していいわよ」

「出来る事ならその娘とはあんまり関わりたくないです姉さん」

「そうねえ、洗ちゃんに毎日魔力切れを起こされるのも嫌だし……」

極力召喚しないことにするわね。テト、キュリ、戻りなさい」

姉さんが再び指を弾くと、逆再生されたようにテトとキュリオスの姿が消えていく。

「テトは絶ええええ対にアンタのことなんてマスターなんて思わないですからね！ キュリちゃんもそうですね？」

「キュー？」

テトの言葉にキュリオスは首を少し傾げたと思つと、一人の姿は完全に消えてしまった。

「さあて、洗ちゃん。あの爺はまだこの屋敷にいるの？」

姉さんはそれを確認した後、数秒の間もなく尋ねてくる。

俺はその問い合わせして首を縦に振ると、途端に歓喜に満ち溢れたような声で宣言した。

「ブツ血くエレーチわよ~

「ね、姉さん！？」

その後、俺は姉さんに引き摺られながら陰気な地下室から連れ出され、姉さんを封印していた張本人である爺の部屋まで連行されたのは言つまでもないだろう。

俺は思った。姉さんは人をいたぶつてゐるときこそ一番輝く悪魔な^{ひと}のだと。

「な、洗！ 何故「イツガ」「シチの世界」に召喚された這麼

やひこいこい」

「おらあー、よくもワタシを封印なんてしてくれたな爺イー。」

「おほか、や、セイは」

我ながら凄い従者を召喚したものだと思つ。
最強にして最凶……間違いなく切り札としては申し分ない従者だ
とこつておこつ。

（ナビ……明日から学園に通つのが激しく鬱に感じるのはよつた感じな
いよつた……微妙な気分だ ）

と言うわけで、翌日、当然のことく通学中の俺の隣には姉さんが並んで歩いていた。

別に不満があるわけではない。姉さんは従者として最高ランクの従者に当たる‘始祖の悪魔’に格付けのされるほど実力者である。それに比べて俺ときたら、魔術を学ぶ身でありながら体術ばかり上達しているという現状である。およよそ人間の到達することでのきる最高のランクまで体術だけは昇華させた。だけど、それじゃダメなんだ。

別に武道の達人になりたい訳ではなかつた。本当は魔道を極めたかつた。

しかし、俺は魔道師に至ることはできずに魔術師止まり。他の人間より優れている事と言つたら体術だけと来た。

魔術師は決して魔道師に勝つことはない。この世の中に広がる常識のような言葉。

だからこそ俺は、一人の魔術師としてその常識を覆したい。

「だからこそ、俺は正当な評価を与えたかった奴らを見返してやるんだ……」

「確かにその決意は立派だと思つけど、社会の窓が全開よ……洗ちやん」

けど、それよりも先にこの恥ずかしい出来事を現実から消し去りたい。

「べ、べべ、別に知つてたからな！」

俺は急いで全開になつてゐるズボンのチャックを閉める。

「はいはい、分かつてゐるわよ……。それにしても長い坂道ねえ」

姉さんはそんな俺の言葉を華麗にスルーしながら、通学路である、通称、魔道師殺しの坂、を見据える。

「なんたつて、通称が、魔術師殺しの坂、だからね」

何故この通称で呼ばれているのかといえば、答えは単純なことである。魔道師には出来て、魔術師には出来ないことがあるからだ。

それは飛行魔術である。

魔道師の第一歩として試されることが、この通学路にある坂道を飛行魔術で楽々通学することである。

入学式の時には既に優劣がはっきり分かるという鬼畜な通学路であると言つことはつい最近知つたことだつた。

「そりいえば洗ちゃんつて飛行魔術が苦手だつたね…………」

「俺は姉さんみたいに何でも出来る人とは違つんだよ」

昔のことを思い出しながらと言つた風に呴く姉さんに対して、俺はハッパたり氣味に言葉を返す。

「あら、ワタシだつて、始祖の悪魔、に数えられる前は洗ちゃん位にしか魔術は使えなかつたし、もしかしたら洗ちゃんよりも弱かつたのよ」

それに対しても姉さんは空に流れれる雲のよつて、自由気ままな感じで答えた。

正直、俺には一生かかっても出来ない生き方だと思つ。それに、稀に羨ましいとも思つていた。

「嫌味にしか聞こえないよ……姉さんがそれを呟つのはやく

だから俺は少し拗ねた様に言葉を返す」としか出来なかつた。

「ま、洗ちゃんはワタシを召喚して従者にしてんだから皿を持ちなさいな。そうじやないと従者として一生、洗ちゃんのことを主だと思つ日が来なくなっちゃうから」

そんなこんなで俺と姉さんは約三十分後に校舎に到着した。ちなみに本当に余談ではあるが、この学園には学年に五つのクラスが存在する。

A組、魔法使いに属する生徒が集まるクラスである。

B～D組、主に魔道師に属する生徒が集まつたクラスである。

E組、魔道師にすら至ることのできなかつた生徒の集まつたクラスである。

つまり、何が言いたいのかと言つと……、俺はE組の住人であるということだ。

そんなクラスの一番後ろにある窓際の席が俺の席である。

「お、今日はお前が一番が洗……。つて、お前の隣にいる綺麗なお姉さんは誰だよ？」

そして、たつた今声をかけてきた陽気な男は 笹宮凪ささみやなぎである。

クラス内の呼び名はナギだ。

「よ、おはようナギ。」人は昔、俺の専属の教育悪魔だった天音姉さん。で、今は何の因果か俺の従者になつた

「は？ 天音つて、あの、六大始祖、の一角の天音か？」

ナギの「冗談だろ」というような驚きの口調に、俺が答えるよりも先に姉さんは口を開いていた。

正直な話、これが俺と姉さんの学園記録の始まりだつたのかもしない。

「ふふ、よく知っているわね。お姉さん嬉しいなあ」

姉さんの言葉に、ナギはわなわなと身体を震わせながら小さく咳く。

「……それで……」

その声は聞こえるか聞こえないか微妙な大きさの声だったが、次第に大声に変わっていた。

「魔術師が魔道師劣るつていう理屈は覆せるぜー！」

その声は教室だけではなく、学園中に聞こえるほどに大きな声だつた……のだと思う。

だから集まつてくるのだ。格下のものを馬鹿にする嫌味な連中が。

「へえ、落ち零れのE組の生徒が何を騒いでいるかと思えば……」「魔術師が魔道師に勝つ？ とんだ笑い話に過ぎないよ」

そんなことを好き勝手に言いながらE組までわざわざ来た人物は、魔道師学級の中でも上位魔道師に位置するB組の中でも有名なウザさを誇る鳴神兄弟だつた。

もちろん、そんな安い挑発にナギが食つて掛からないわけはない訳で……

「はん、お前らみたいな魔道師なんて血統に物を言わせた親の権威を振りかざしてゐる卑ひな人間じやねーか」

その言葉を待つていたといわんばかりに鳴神兄弟の目がいつもの如くきらりと光るのだ。

「じゃあ、校則に則つて決闘でけりをつけようじやないか。魔術師」「やつてやるよ、俺の代わりにこいつがよー！」

その瞬間、俺の背中にナギの掌が打ち付けられた。

……打ち付けられた？

「……は？ 何で俺が決闘なんてしないといけないんだよー…？」

しばしの思考停止の後、俺はナギに怒鳴るように言い返す。

「えー、お姉さんも洗ちゃんの成長振りを少し見たいなあ」「何を人事みたいに言つてゐるんだよ姉さん！？」

だが、それに対しても言葉を返したのは姉さんで、あまつさえとんでもない事を言つてくれた。

「だつて、そこの一入つて私から見れば洗ちゃんより実力は下よ？」「なつ、何言つて

「

そんなこと言つたら本気で俺が魔道師一人と戦つこと……

「へえ、君の従者は随分と面白いことを言つね……。決めたよ、君には僕たち一人から正式に決闘を申し込むよ。それで思い知ると良いさ、自分の従者がどれだけ無知なことを言つてしまつたのだとね」

一人の声が重なつて聞こえた。

「なつ、待つてくれよ。気を悪くしたなら謝るからさ、な？」

「いいや、常々思つていたんだ。この学園に魔術師なんて存在を教育させるような金を使わせるのは勿体無いってさ」

俺の言葉は結局、鳴神兄弟に聞き入れては貰えなかつた。時既に遅し。いや、この場合は覆水盆に返らずの意味のほうがどちらかと言えば合つてゐる気がする。
そもそも、とばっちりもいいところだ。本人の意思に関係なく、勝手に決闘を申し込まれるなんて……。

「そんなんに落ち込むことないでしょ、洸ちゃん」

そんな極度に落ち込んだ俺の背中を、姉さんはバシッと一回強く叩く。

だけど、返す言葉が何一つ思い浮かんでこなかつた。

「ま、洸。俺はお前が勝つって信じてるからよ」

いい笑顔で親指を立ててゐるナギの指を見て、俺は力なく呟く。

「なんだ、その指をへし折ればいいのか？」

そもそも、絶対に姉さんは決闘の意味を分かつてない。

この学園における決闘では、勝者は敗者への強制執行権利を契約書^{1バ}によつて奪い取ることが出来る。

酷い場合は即刻自害を要求されたりと様々合つたらしいが、今は契約書規定によつて最低限の人権と生命活動を守られているが、それでも従者に対する強制執行とは異なつて、対象者に対する拒否権は与えられない。

つまり、契約書が存在する限り脅えながら生活をしなければならないということになるのだ。

それをよりによつて、あの鳴神兄弟一人に決闘を申し込まれるなんて……

「たぶん、あの学園長は笑いながら許可を出すんだろうな……激しく鬱だ」

再び小さく呟くと、姉さんが俺の肩に手をポンと乗せるように何回か叩いた。

「大丈夫、いざとなつたらお姉さんが助けてあげるから」「つまり、それまでは自力で死ぬ氣で戦えと？」

否定して欲しかつた。

けど、姉さんはサディスティックな笑みを浮かべて頷いた。

「そ、いざとなつたらね」「強制執行を使って無理矢理戦つてもら

そこまで言いかけたところで姉さんは妖艶な笑みで答えた。

「洸ちゃんの魔力じゃそこまでは無理よお。ふふ、とつあえず頑張つてみれば良いじゃないの」

俺は返す言葉を完全に失い、茫然自失のまま姉さんの言葉に頷くことしかできなかつた。

「ま、俺も応援には行くから安心しろつて」

その時の俺はまだ、本当の意味で姉さんの主にはなれてなんかいなかつたんだ。

今だからこそ言える。

姉さんは俺のことを一つでも一番大事に思つてくれていたんだつて。

プロローグ・完結

「それではこれよりB組、鳴神雨竜、鳴神晴竜の二人とE組、今神洸及び従者の天音の決闘を宣言する!」

学園長の宣言に、噂を小耳に挟んだ生徒の群れが喚声を上げる。噂……と言うよりも厳密に言つのならば、ナギが全学年を大声を上げて歩き回つた結果がこれだ。

そもそも観客がこんなにもいる状態で負けるなど、ただの辱めである。魔術師が魔道師に……それも、従者と主だけで挑むということ自体が前代未聞の事態だ。

今までに何度か存在した魔道師と魔術師の戦いはいずれも一対多数の決闘であったが、そのいずれも魔術師は魔道師に惨敗してきた。もちろん今まであつた決闘に参加などしていないが、それでも決闘なんてする前から結果なんて分かりきつている。

「どう足搔いても俺一人じゃ数秒も持たないって……」

俺がぼそりと呟くと、姉さんは笑みを浮かべながら言葉を返してきた。

「それはやつてみないとわからないわよ…………。それに、お姉さんの言葉が信じられないって言うの?」

「俺の実力が鳴神兄弟よりも上だつて事か? 姉さんの言葉でもそれは信じられない…………」

俺が使える最大の魔術は、模倣」と「時間操作」の中位魔術が限

界だ。

模倣と言つても、出来ることといえば戦闘経験を模倣と言つ仮想エミコレーターを使用した体術の戦闘経験の憑依が良いところし、俺の使う魔術は現代魔術の我流アレンジと言うのが一番しつくり来るだろう。だから魔術名が機械などから取られているものが多いのだ。

「でも、まあ……いざとなつたら姉さんが助けてくれるんだろう？ だつたら精一杯やってみるさ」

けど、俺の後ろにいるのは、始祖の悪魔、の一角であり、師匠である姉さんがいるんだ。

「仮想エミコレーターによる戦闘経験の憑依及び加速装置による戦闘補助を開始」

「そ、洗ちゃんのお手並み拝見つと」

俺の後ろで姉さんは胡坐を組んで座り込むと、観客に紛れていたナギを引っ張り出して隣に座らせていた。

「えつと、ナギ君だけ？ 洗ちゃんが負けたら死なば諸共と言つことだから覚悟しておいてね」

その言葉にナギは顔を真っ青にしてこくりと頷いていた。

ほんの少しだけ同情してしまつたが、そもそもの原因はナギのせいなのだからと思い直し、俺は鳴神兄弟に準備は出来たといわんばかりに睨み付ける。

「へえ、従者は決闘に参加させないのか……」「もしかして君って、魔術師云々の前に頭の中空っぽだつたりするのかな？」

鳴神兄は感心したよう、「弟は馬鹿にするような口調で思い思いで言葉を放っている。

だが、その一瞬は俺にとって絶好の好機チャンスである。

「頭の中が空っぽで悪かったな！」

加速装置の利点は三つある。

一つ、前動作抜きで動くことが出来る。
これはつまり、命令のように一瞬で目標に接近する」ことが出来るといふことだ。

一つ、音速の壁を蹴ることが出来るようになる。

これは加速装置によって擬似的に音速の壁を作り出し、飛行魔術を使用しないでも空中闊歩ができるようになるといふ利点が存在する。

三つ、全ての過重負担を加速装置が稼動している限りゼロにすることが出来る。
これによって人間に不可能な動きを実現することが出来るようになる。

「ふん、これだから魔術師の使用する魔術は品が無いといふんだよ

鳴神兄は悪態を突くかの様に小さく呟くと、その掌の上に加工済みのルビーのような輝きを放つ物体を発生させる。

「炎の四法ー? 違う? 召喚か?」

それはマグマの圧縮体のようだ。

鳴神兄の掌で生成された‘ソレ’は掌から零れ落ちると、トカゲ蜥蜴の
よつ生物になっていく。

「火炎精靈」
サラマンドワ

涙目になりそうな感情を押さえつけて、後ろで傍観者を氣取つて
いる姉さんに俺は叫ぶ。

「精靈召喚つて　　姉さん、この一人が本当に俺より実力が下
なのかよ！？」

「精靈召喚なんてワタシに比べればどうしたことないでしょー」

だが、姉さんから返ってきた言葉は返ってきて欲しかったような
言葉とは全く違つた。

そもそも、鳴神兄だけでも無理ゲなのにもれなく弟もいる
んだぞ？

「やつぱり無理ッ！」

「ハハハッ！　これが魔術師と魔道師の力の違いといつも。晴
竜、お前も見せてやるといい、力の違いをさー」

加速装置の出力を最大限まで発揮させ、襲い来る火炎精靈の猛攻
を紙一重で回避するのが精一杯の状況で、これ以上何をどう頑張
ればいいのだろうか？

それでも姉さんは、俺のことを後ろのほうで見守つてゐるだけだ。

「そんなに逃げ回ついたら身体も火照つてきただろ？　僕の厚意
も受け取つておきなよ」

それに加え、鳴神弟は鳴神兄とは正反対の属性の精霊召喚を詠唱している。

正反対の精霊召喚…………これは好機か？

「ライナック オーバーアクセル 加速装置最大出力！」

俺は加速装置の出力を文字通り最大出力まで上げる。

『攻撃をするのか？』と問われれば、そうではない。狙いはまつたく別なところにある。

「そうだ、お前ら魔術師はそつやつて無様に逃げ惑えればいいのさー。」

「勝手に言つてろ……」

校庭の地面が高熱によつて焦がされ、異臭が鼻を突く。しかし、今はそんなことを気にしている場合ではない。

なぜなら、俺の眼前では口元から冷氣を放つてゐる狼のよつな精霊を召喚した鳴神弟が立ち塞がつてゐるからだ。

「フェンリル 氷精霊」

だが、俺はあえて口元を不敵に歪ませて見せる。そして、呟くのだ。

「天才つてのは手に余つちまつものだよな？」
『行け！』

その言葉に反応するよつに、鳴神兄弟の召喚した二体の精霊は前後からほぼ同時に突進してくる。

この状況こそ、圧倒的に能力で劣つてゐる魔術師の俺が魔道師に

勝つために考えた策。それも、成功確立は五割を下回るよつた下策だ。

「姉さん、これが俺にできる限界だ！」

その場で左脚だけに力を込め、加速装置の補助を施している右足で音速の壁を蹴り上げる。

音速の壁は蹴られる事によって破壊され、衝撃加重に比例した爆発的推進力を作用者にもたらしてくれる。本来なら人間には決して耐えることのできない衝撃すら、加速装置が吸収してくれるため、この下策は初めて上策に成り代わってくれるという寸法だ。

『なつ、僕たちの力を利用しただつて！？』

火炎精霊と氷精霊は俺の目論見通りに、突進していたスピードを殺しきれず激突しあう。兄と弟の召喚した精霊に大きなランクの違いがあったのか、兄の召喚した火炎精霊は大きなダメージを負つたようだ。

「へえー、洗ちゃんも意外な方法で立ち回るのねえ。でも、それだけじや精霊を強制返還はできないわよ」

だが、後ろで姉さんが呟いたように強制返還をするまでは到らなかつたようだ。

「チッ……」れじや打つ手が無い つて、姉さん？

いつの間にか、俺は本気で勝つために戦っていたようだ。姉さんに再開するまでの俺なら、間違いなくあきらめていた決闘を。

「さあて、洗ぢゃんがお姉さんの教えを思い出してくれたよつだからお姉さんもそろそろ期待に添つてあげようとするかしら」

いつの間にか隣に立つていた姉さんは俺の頭を優しく撫でた後、何かを呟く。

その呟きが詠唱だつたのか、姉さんを召喚した際に付属品のよつに召喚してしまつた毒舌少女（俺命名）テトが不満げに文句を言いながら召喚された。

「どうしてテトが天音様の為ではなくこんな人間なんかのために…でも、天音様の命令だからテトは頑張ります！」

テトはとてとてと前に歩き出ると、どこからとも無く取り出した猫の手のような大きなハンマーを肩に担げよう手に持つ。

「なつ、姉さん？ あの娘が俺より強い」

俺がそこから続きを口に出そうとしたとき、出せつとしていた言葉をいつの間にか飲み込んでいた。

だつてそうだろ？

何故なら、さつきまで苦労して回避をしながら攻撃をしていた火炎精靈と氷精靈を猫の手のような大きなハンマーを一振りしただけで強制返還させてしまつたのだから。

「テトに勝つつもりなら古龍種でも召喚しやがれつてんです」

しかも、本当に服についた「ミ」を手で払つかのように一瞬でだ。

「な、従者が召喚師… もともと主より優れているだつて！？」

「魔術師の召喚した従者に僕たちの精靈が一瞬で… ば、バカな！」

そんな言葉を好き放題に言つてゐる鳴神兄弟の言葉はテトの触れてはいけない何かに触れてしまつたのか、テトの額に青筋が一本浮かぶ。

「天音様……こいつ等ムカつきます！ 人間、どうやらお前に負けるのが一番屈辱な様でお前が止めをさすです」

俺はそんなテトの迫力に負けてしまい、無言で加速装置で鳴神兄弟に近づいて反撃の間すら与えずリバーブローを叩き込む。

『ウツ……』

「なんか……悪い」

同情せずにはいられなかつた。

「Eの決闘、勝者はE組の今神洸！ 強制執行の権利書の譲渡は後田学園長室によつて執り行つ！」

その日、魔術師が従者を従えて魔道師に勝利するという偉業が達成されたという事実だけがネット放送によつて全国に報道された。

俺はこの日に思つた。

いつか必ず、姉さんの隣で一緒に胸を張つて歩けるような存在になりたいと。

魔術師も魔道師に勝つことができるという事実がネット放送をして全世界に広がると、世界中に存在している魔法学校は群雄割拠の時代を迎えた。

今まで辛酸を舐め続けてきた魔術師連中は今までに増して、己の行使できる魔術を磨くことに専念するようになった。ある意味でいい傾向にはあるが、思い上がりだけで魔術師が魔道師に勝つことはやはりあり得ないようだ。

だが、それは同時に、今までのように魔道師たちが才能に物を言わせて努力を怠り続ければ、いずれは魔術師が魔道師の上に立つ時代も来るかもしれない。

しかし、この考えはあくまで仮定である。

「それにしても……だ。ナギ……お前は他の連中みたいに努力して強くなろうとは思わないのか？」

「んあ、別に魔術師と魔道師の戦争が勃発するわけでもないだろ？」

「だったら、俺は今までどーりに自分に見合った努力を続けるよ」

何故なら、こうして今までと立ち位置を変えない人間も多数存在するからだ。

書く言つ俺も、あれから姉さんの特別授業を除いては今までと特に変わらずに学園生活を送っている。

「でも、洸ちゃんは学校が終わったらお姉さんの特別授業があるからね

「わかつてゐるよ……。えつと、今日は二大魔法と契約についてのシステムの復習……だつけ？」

「今やう……そつ思つよつた特別授業の内容ではあるが姉さん曰く、『基礎知識の向上は洸ちゃんみたいな近代魔術を利用する人間にとつてもつとも大事なことなんだぞ』

だそうだ。

実際のところ、基礎知識などの基本的な部分は正直な話だが、この学園に存在するどの生徒よりも成績は秀でている方であると自負している。

姉さんの言葉のように、近代魔術は古代魔術とは違つて基礎さえ抑えていれば安定した出力を出すことができる。つまり、基礎こそが近代魔術にとつての根幹であると言えるのだ。

「そ、基礎知識はバツチリなようだけど確認も兼ねてね。それと、契約システムについては洸ちゃんはまだまだ知らないことが多いみたいだし」

「姉御も随分と洸に手を焼くんですねえ」

今の今まで机の上で、ぐでーん、と伸びていたナギは空気が入つたように綺麗に背筋を伸ばして起き上がると、目を輝かせながら一ヤケ顔で姉さんに向かつて言葉を放つ。

「まあ、大切な教え子であり主だしね。お姉さんは先生としても洸ちゃんの世話を焼いてあげたいのだ」

姉さんはそんなことを言つて、わっしわっしと俺の頭を撫で回す。

「や、やめひいて、もひんんな歳じゃないだろ?」

「ひん。お姉さんは光ちゃんのお姉ちやんで先生なのだから問題は無いのだ」

俺の言つた言葉は無意味どころか逆効果で、さうに頭を撫で繰り回される。けど、不思議と嫌な気はしなかつた。

もつとも、どこからか感じる射殺すような殺氣さえ感じなければの話だが。

そこで、ようやく授業開始五分前を知らせる予鈴がスピーカー越しに校内に鳴り響く。

「お、そろそろ授業の時間だな……今日一日がんばりますか」

そう言つてナギは自分の席に戻つていぐ。その隣には、ナギの従者であるシンテールの小学生ほどの女の子がひょこと申し訳なさそうに座つてこる。

もちろん、俺の隣には姉さんが座つている。

「俺もがんばるかな……」

ひつひつ、俺の長い一日が再び始まったのだ。

何度も言つようで悪いが、俺こと今神洸は魔術師である。

魔術師だから、魔道師や魔法使いを目指して今日も勉強していた。それだというにも拘らず、俺は魔術師としての偉業をつい先日になし遂げてしまった。それも、自分の力ではなく従者である姉さんの従者の力によって。

しかし、いつの時代でも事実というものは捻じ曲げられて民衆に放送されるものだ。

「今神……お前が鳴神兄弟に勝利してからというもの、何故だか知りたくも無いが近代魔術の授業は人数以上に視線を感じるんだ」

E組の担当魔術のすべてを受け持つ教師である、蓮見煉慈先生は俺に向かってめんどくさそうな口調で話しかけてくる。

「知つたこっちゃありませんよ……。それに、あの決闘だつて事実だけが広まつて内容は公表されていないみたいですし」

それに対してもう一度言葉を返すと、煉慈先生は厭味をいつかの如く、姉さんをちらちらと見てから黒板に無言で文字を書き込んでいく。

黒板に大きく書かれた文字は『実習』の二字。

「というわけで、今日は近代魔術による召喚術についての実習を行う。一旦、自分の従者及び使い魔を返還してくれ！」

煉慈先生の言葉に、ナギを含めた俺以外の生徒たちは次々と従者及び使い魔を返還していく。

「それじゃ、ワタシも返還するかな」

そして、姉さんは勝手に転移術式を発生させて召喚される前の場所に戻っていく。

煉慈先生は姉さんが完全に返還されたことを確認した後、改めて教室内に従者及び使い魔の類が残っていないことを確認すると、再び黒板にでかでかとチョークで文字を書き込んでいく。

そこには先ほどとあまり変わらない大きさの『付』『効果』四文字が書かれていた。

「それじゃ、お前らに一つ問う。付与効果とは一体どのようなことを示している。ナギ、答えてみろ」

煉慈先生に指名されたナギは、席から立ち上がるといつもの様な口調で答えた。

「従者及び使い魔を召喚する術式に強化の術式や対属性の術式を組み込むこと……であつてますかー？」

「まあ、そんな感じだ。座つて結構だ」

煉慈先生の言葉にナギは小さく頷くと、自分の席に座りなおす。

「そしてお前らに『』える課題は……、シンクロ同調の術式を組み込んでの契約済み従者及び使い魔の召喚だ。何か質問はあるか？」

そんな煉慈先生の問いかけに、少し小柄な銀髪の少年クラスマイトの一人であるシグ・フレイマーは立ち上がって疑問を口にする。

「同調の術式を組み込むことによって出来る事は契約の際に繋がるパスがあれば大体のことは出来るはずなんだけど……その説明を

頼めるかな、煉慈さん」

「いい質問だ、シグ。この同調の術式を組み込むことによって主から従者、使い魔への一方通行な魔力の流れを循環させることができるものになるんだ。つまり……バスとは違つて、より一層従者との繋がりが強くなるし、主の魔力切れを防ぐことが出来るようになる。説明はこんな感じだが……シグ以外に何か聞きたい者はいるか？」

煉慈先生の一度目の問い合わせに声を上げるものはいなかつた。

「そんじゃ早速、各自で召喚術式を書いてくれ。そこに同調の術式を加えて魔力を注げばいい。術式を組み込むときは契約刻印を上書きするんじゃなくてバス回路に上書きをすることが重要だ」

煉慈先生の支持伊通りに、E組の魔術師は次々に自分の従者や使い魔を再召喚していく。先ほど質問していたシグは完璧に同調の術式が馴染んでいたのか、従者である「白面金毛九尾の狐」の子孫、九代目玉藻の尻尾が主であるシグの尾？骨のあたりから、ゆらゆらと蜃氣楼のようぼんやりとだが生えていくように見える。

そしてナギだが、どうやら術式を組み込むことに失敗したらしく、従者のツインテールの少女の身体が成長した反面、召喚者であるナギの身体が十代前半まで若返つてしまつている。

しかし、当の本人であるナギは従者の成長した身体に抱きつくなどしているところを見る限り、一概に失敗したとも言えないようだ。そして俺に至つては……

「姉さん……何で猫耳なんだ？」

「そういう洗ちゃんだって犬耳が生えてて可愛いわよ」

どこかで失敗してしまつたのだろう。何故かお互に獸耳が生えてしまうという始末。

しかし、バスを繋いでいたときと比べても魔力の供給の通りが良くなっている気がする。そして、姉さんの、魔、に関する情報が頭の中に微量だが供給されるようになつた。

「それにしても……なんで猫耳と犬耳なんだ？」

「それはね……おそらくだけど、お互いの最も見たい相手の姿の具現だと思うの。だって、さっき洗ちゃんが猫耳つけていたら可愛いなあつて考えていたところ召喚されたら猫耳の洗ちゃんがいたし。

それと洗ちゃんが犬耳萌えだつたなんてお姉さん知らなかつたなあ。今度からこの格好で一緒にいてあげるわね

」

ワインクと同時に胸を押し付けるように姉さんに抱きつかれた。

「うあつ、やめろよ姉さん！」

「何も嫌がること無いじゃないの～」

「嫌がるとかそういう前に他の奴らの視線が

ああもう！ お

前らも温かい目で見守ってるんじゃねーよ！」

そんなこんなで、午前の授業を終えた俺たち一行は学食に向かう。ちなみに一行というのは、俺、姉さん、ナギと従者の少女、そして何故かシグと従者の九代目玉藻のことだ。

もともと俺はナギと仲が良かつた為に特に問題は無いが、シグは違う。

彼はいつだって一人で常に在るというスタンスでクラスメイトの一員として存在していた。それがつい最近になつてからというもの、今の従者である九代目玉藻をこの学園に連れて来るようになつた。

そして、先日の決闘の後と言つものは興味を持ったのか俺と一緒に昼休みを過ごすことが多くなった。
それが今の状況である。

「なあ洸、ここいらでそれぞれの自己紹介を改めてしておかないか？」

ナギはテーブル席の一角に座ると、思いついたように話しかけてくる。

「姉さんの正式な紹介もしてない……つか、ナギの従者については一度も話して貰つた記憶も無いしな」

「ワタシもさんせーい。だって、ナギ君の従者の女の子が可愛いいいから」

「わ、私ですか！？ 六大始祖の天音様にそんなことを言つてもらえるなんて……ナギ様、私はどうすれば！？」

姉さんの言葉にナギの従者の少女が顔を真っ赤に染め上げて、ナギの服の裾をバタバタと引っ張りながら暴走している。

「いやー、俺は百合もいけるからおぐ。じとじとやつてくれよな、エリーナ」

そんなことを言つて親指をぐつと立てているナギの姿を見て、正直なところへし折りたくなつてやつた。

「百合……？ ナギ様、百合とは何でしょうか」

そんなナギに対してもエリーナと呼ばれた少女は、純粋無垢な眼差しでナギの事を見つめている。

姉さんも混ざつて話があらぬ方向に曲がつてしまつ前に、俺はシ

グに話しかけた。

「なあ、どうしてお前はスタンスを変えた。やつぱりや、あの決闘があつたからか？」

「スタンスを変えたつもりは無いよ。けどね、君たちを見ていたらあの人のことを思い出しちゃってね……。そしたらなし崩しに寂しさが襲ってきた。だから玉藻を呪喚したんだ」

俺の言葉に対して、シグは何の迷いも見せずに決まっていたかのように答えを述べた。

「どうしてだらうか……シグの言つてることを疑うことが出来なかつた。

「じゃあ、どうして俺たちに近づいてきたんだ？」

「さあね、僕は僕の正しいと思つた事を基準に行動しているだけだから……。それと、僕からも一つ聞いてもいいかな？」

俺は無言でこくつと頷く。

「洮、君ならだ。もしも大切な誰かが自分の手の届かないところに行つてしまつたらどうする。自分の手の届かない高みへ行つてしまつたら？」

その質問は、まるで俺を試すかのような口調で言われた。だから俺も迷うことなく答える。だって、答えはあのときこもつ決めたから。

「胸を張つて隣を歩けるようになるまでその背中を追いかけ続けるや。どんな苦渋の道でもな」

その答えにシグは納得したのか、彼の隣に座っていた玉藻の頭を優しく撫でる。そして、変化の少ない表情を少し緩ませた。

「やつ……か。そうだね。その答えを初めから持つていいなりやつと大丈夫だよ。蒼香ちゃん、行こいつか」

「そうですね、行きましょうか」

シグは玉藻 蒼香と共に立ち上がり、学食の出口に向かって歩いていく。

「あ、ちゅ、昼飯食わないのか?」

「気づいてないみたいだけど、昼食を食べてないのは君だけだよ」「なつ!?

俺は急いでナギと姉さんのせつを見る。

そこには綺麗になつた容器だけが置かれていた。

「な……いつの間に……」

「どつしたの洗ちゃん?」

俺は姉さんの不思議そうな声を聞くと同時に、急いで食券を貰いに行く。

姉さんは理解できないといった風に俺の座っていた席の隣に座ると、テーブルの上に肘をついて手の上に顎を乗せる。

俺はそんな姿を見ながら食券をおばさんに手渡し、その代わりに渡された天ぷらそばを眺めながら小さく呟いた。

「不思議なやつだよ……アイツ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2478z/>

僕と六大始祖の学園記録

2011年12月16日18時56分発行